SDGsの視点で見る
大学の学び

古代から現代まで幅広く哲学を学び、現代の諸問題との接点を見つけることで、物事の基本的な意味や価値を捉え直す

上智大学 文学部 哲学科

1年次から、対話重視の演習で思考力・表現力を養う

上智大学文学部哲学科では、古代ギリシアから中世キリスト教、近現代に至る哲学・思想を広く学び、自らの力で考え、表現する能力を養うことを重視した教育を行っている。

上智大学大学院文学研究科哲学専攻博士前期課程1年の小久保天音（あまね）さんは、高校時代、一般的に言われるような、熱い友情や青春は尊いといった価値観に意味を感じられなくなり、虚無感を抱いていた。

「哲学を学べば、虚無感の正体が分かり、自分の軸になるものを見つけられるのではないかと考えました」

哲学科のカリキュラムの特徴は、3つある。1つめは、思考・表現する能力を養うために、1～4年次まで、少人数での対話を重視した演習や文献講読の科目を設置していることだ。1年次の「哲学演習Ⅰ」は、プラトンやカントなどの西洋哲学の古典文献について、20人程度のゼミ形式で学ぶ。中国の大学を卒業後、哲学を学ぼうと考え、同大学に入学した同専攻博士後期課程3年の胡婧（こせい）さんは、次のように語る。

「仲間との対話を通して、同じテーマでも、他者が自分とは全く異なる視点で考えていることを知り、衝撃を受けました。ただ、皆、自分とは異なる考えでも受け止め、テーマを深め合うことができたのは有意義でした」

2つめは、哲学の原典講読に備え、語学を重視していることだ。全学共通科目の英語のほかに、学科必修科目として、第1外国語（＊1）の授業が週3日設置されている。

3つめは、西洋の哲学史について、古代から現代まで、十分な時間をかけて学ぶことだ。小久保さんは次のように話す。

「哲学者は、前の時代や同時代の思想と深く関係した思想を紡ぎます。私は、現代の哲学者、ハイデガーの思想に沿って研究をしていますが、古代から現代までの哲学史を学んだことが、研究の強い基盤になっています」

人生に価値を見いだす研究で、社会問題の見方が変わる

2年次からは、関心のある分野に応じて、哲学思想・倫理学・芸術文化の3つの系列に分かれる。3年次の終わりには、専門分野を意識し、論文指導教員を決めて卒業論文の執筆に取り組む。小久保さんと胡さんは、近現代ヨーロッパ哲学が専門で、**「目標16 平和と公正をすべての人に」**や**目標4・10**に貢献する研究を行う大橋容一郎教授の下で、卒業論文を執筆した。

小久保さんは、人生に意味がないと感じる「ニヒリズム」（＊2）を乗り越え、人生に意味を見いだせるように

私たちが紹介します

上智大学大学院 文学研究科哲学専攻 博士後期課程3年 胡婧（こせい）
中国・合肥市第四十中学卒業。安徽大学日本語教育専攻卒業。上智大学文学部哲学科卒業。

上智大学大学院 文学研究科哲学専攻 博士前期課程1年 小久保天音（こくぼ・あまね）
東京都立西高校卒業。上智大学文学部哲学科卒業。

目標の解説はWebでCheck!
または、
HOME ＞ 教育情報 ＞ 高校向け ＞ コーナー別 記事一覧からもお読みいただけます。
https://berd.benesse.jp

＊1 ドイツ語・フランス語・英語の中から1つ選択。　＊2 虚無主義。既存の価値体系や権威をすべて否定する思想や態度。ニーチェなどに代表される。

なるにはどうしたらよいか、哲学的に考え、研究を行った。

「研究当初は、周囲の価値観に違和感を覚えていたので、絶対的なものを探そうと考えていました。しかし、研究を進めるうちに、人生には絶対的なものは存在せず、ありもしない理念にしがみつくことは、さらに『ニヒリズム』を悪化させる恐れがあると気づきました。そこで、学士論文では、ニーチェの思想『力への意志』に基づき、自分にとって意味が感じられる価値を定立していくことが、人生では重要であると結論づけました」

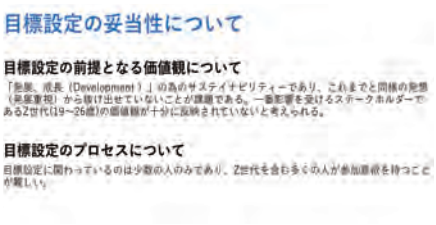
博士前期課程でも、その研究を続けるうちに課題にぶつかった。自分で価値観を生み出し続けるのには限界があると考えるようになった。

「現在は、自分で価値を定立するのではなく、自分や他者、また世界の根源に立ち戻って研究することがニヒリズムの克服に必要だと考えています。」

哲学の研究を通して、社会問題の見方も変わったと、小久保さんは話す。

「一歩日常の外に出て、方法論的に問うことができるような哲学的思考は、個人的問い、社会的問いに関係なく、物事を問うための方法や道筋を与えてくれます。例えば、世界規模で環境や貧困問題に取り組むSDGsには賛同していますが、発展・成長を重視した目標であることに課題を感じています。目標設定の前提となる価値観について、若い世代の視点も踏まえ、検討すべきではないかと考えています（目標16）」（図）

図　小久保さんが考える SDGsの課題



研究を踏まえ、SDGsを実質的なものにするためには、目標設定の過程の透明性、特に、Z世代の参加の可能性を確保することが大事だと考えている。

写真　2018年、北京で開催された哲学系諸学会国際連合総会及び第24回世界哲学大会に参加した胡さん。近代中国の平等理論について発表した。

中国における平等や近代化の思想変容の研究を行う

胡さんは、自身のルーツである中国の思想をテーマに、学部時代は中国における平等の概念を研究した（写真）。その研究を通じて、西洋文明とのかかわりの中で変容してきた平等の概念を新たな視点から解釈した。さらに、西洋的近代に直面した東アジアの近代化への模索は、現代世界にも大きな示唆を与えていると考えた。

現在は、19世紀末から20世紀中頃の中国における近代化の理解と、現代的意味をテーマとして研究を行っている。胡さんは、そうした研究が、現代社会の平等や貧困問題を考える上で重要だと強調する。

「産業革命による西洋的近代化によって、現代社会は物質的な豊かさを手に入れました。しかし、自立的な精神を育てない限り、本当の意味での貧困をなくすことはできません（目標10・16）。人間精神に価値性を見いだすことの重要性については、20世紀の中国でも議論されていました。一人ひとりの人生をよいものにするには何が大切なのか、学術的な価値だけでなく、実現可能性も踏まえ、今後も研究者として哲学を追求していきます」

学びとSDGs

グローバル社会における諸問題の解決に不可欠な哲学

上智大学
文学部　教授
大橋容一郎
おおはし・よういちろう

私は、哲学とSDGsなどの社会問題との関係についても研究しています。そのため、指導する学生の多くは、古典的な純哲学のテキストや理論と、現代の問題との接点を見いだそうと学んでいます。

2021年、科学技術基本法の改正施行によって、自然科学に人文・社会科学を融合した「総合知」が、社会問題の解決に役立つとされました。例えば、SDGsの各ターゲットには数値目標がありますが、SDGsが重視する「ウェルビーイング」の定義はあいまいです。よく生きるとは、どう生きることなのか。よく生きれば、なすべきことをしなくてもよいのか。そうした物事の基本的な意味や価値を人間の立場から考えていくことが、私の考える哲学です。

そうした哲学の研究をしていくためには、心身ともに健康で、自分自身を見つめることや、他者と真面目な話題で対話することを恐れない勇気を持つことが重要です。